ローレライ２００８

Michel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ローレライ２００８

【Ｎコード】
Ｎ２１９７Ｅ

【作者名】
Ｍｉｃｈｅｌ

【あらすじ】
たとえば晴れた夜、ふと見上げた星の彼方からこちらを眺めている誰かの存在を知ってしまったら、それはとてつもなく“不可思議”で“神秘”な事なのかもしれない。けれども、２３０万光年も離れた小さな星の中で、地球の片隅から零れ落ちた伝説の調べに耳を傾け、つい口ずさんでしまった異星人の少年がいたのだとしたら…

…

たとえば晴れた夜、ふと見上げた星の彼方からこちらを眺めている誰かの存在を知ってしまったら、それはとてつもなく“不可思議”で“神秘”な事なのかもしれない。

けれども、２３０万光年も離れた小さな星の中で、地球の片隅から零れ落ちた伝説の調べに耳を傾け、つい口ずさんでしまった異星人の少年がいたのだとしたら……

Ich weiss nicht was soll es bedeuten,
Das ich so traurig bin.
Ein Maerchen aus alten Zeiten,
Das kommt mir nicht aus dem Sinn.
Die Luft ist kuehl und es dunkelt
Und ruhig fliesst der Rhein,
Der Gipfel des Berges funkelt,
Im Abendsonnenschein.

なじかは知らねど　心わびて
昔の伝説は　そぞろ見にしむ
寥しく暮れ行く　ラインの流
入日に山々　赤く映ゆる

P. F. Silcher　近藤　朔風／訳

Ｍ３１―アンドロメダ星雲の光の穂先に浮かぶ宇宙基地―コスモベース“ＣＯＳＵＭＯ　ＢＡＳＥ”教育知育区域。
その吸音制御室のデータに目をやり、女性教師ミムラはかすかに眉をしかめた。

「ローレライ？これって、一週間前に……太陽系の辺境の星―地球―から収集したかび臭い伝説の歌じゃないの。一体、誰がこんな歌を歌っているの。それに、卒業試験も近い時期にコスモベースに残っている生徒がいるなんて、どういう事？」
　黄金の瞳に緑の髪、鋭く上に切れ上がった猫のような耳。明らかに地球人とは違う容姿の女教師の問いに、同僚の教師は彼女と同じ瞳の色を少し濁らせてこう答えた。
「ナイトシェイドの弟の方でしょう？あの子の持つ能力が適正試験でひっかかって、卒業試験の宇宙船―インターシップ―に乗ることを禁じられてしまったんですよ」

　ジルとアウル、双子のナイトシェイド姉弟は、コスモベースでも１，２を争う優秀な生徒として名を馳せていた。順当にゆけば、この卒業試験で彼らは正式なインターシップの乗組員になり太陽系惑星の探査の職を手にするはずだったのだが……。

「“歌ってはいけない”と、口をすっぱくして言っておいたのですが、最近のアウル・ナイトシェイドは、とても情緒が不安定で、少しも教師たちの言いつけを守ってはくれないのです。特にあの“地球の歌”を覚えてからは、その傾向が激しくなって、吸音制御室から出せない状態になってしまったのです」
　同僚の言葉にミムラは、もう１度、吸音制御室のデータに目をやり、小さく息を吐いた。

「アウルは歌うのが好き。けれども、アウルの歌を聞いた者は、視界を失い訳も分からずにあの声に魅了されてしまう。それは、このコスモベースを大混乱に陥れてしまうでしょう。ローレライの伝説の話に自分を重ね合わせて、それがラウルを刺激してしまったのだとしたら、あの子にその話をしてしまった私は、大きなミスを犯してしまったのかもしれない」

＊　＊　＊

「アンドロメダ銀河の星雲圏から外に出るわよ。これより、私たちの船、Ｓｅｍｉ－インターシップは、ワームホールを超光速で通過し太陽系へワープします」

Ｓｅｍｉ－インターシップ。それは、コスモベースでも選りすぐりの優秀な子供たちが、“教育知育区域”と呼ばれる訓練機関での履修を終えるための－卒業試験－用に開発された宇宙船だ。小型ではあるが、教官を伴わない訓練生のみの飛行に適合させ、安全性を重視しており、緊急用のオートパイロット（自動操縦装置）や非常脱出装備等は、通常のインターシップよりぬかりがない。

視界の中から押し出されてゆく、アンドロメダ星雲の長い楕円の光芒を惜しむように、ジル・ナイトシェイドは金の瞳を少し細め、Ｓｅｍｉ－インターシップの操縦席のフロントガラスを見つめ続けた。

白く透き通った肌、襟裳でさらさらとたなびく艶やかな緑の髪、そして宇宙年０．６６（地球では１６歳）とは、思えないほどの大人びた端正な顔だちと明晰な頭脳は、優秀さにおいて今年の訓練生の中でも特に群を抜いていた。ただ一人、彼女の双子の弟、アウル・

ナイトシェイドを除いては。

アウルと一緒に、卒業試験のインターシップに乗りたかったのに……

Ｓｅｍｉ－インターシップへの搭乗を禁止されてしまった弟の事を思い、ジルの心は沈んでいた。

だが、

“ワープ終了、ワープ終了”

その報告音と共に突然、目前に広がった６０００億もの光の粒。

「見て！天の川よ！」

天の赤道のはるか北、カシオペヤ座から南十字星にまで流れ込んだ星の銀漢。ワープ航法の終着点に指定した太陽系銀河の星の洪水を目にして、ジルは歓声をあげた。

「地球まであと少しだよ！映像でしか見れなかったあの星を真近にできるなんて、本当にすごい」

背中ごしに聞こえてきた他の訓練生の陽気な声に、ジルは明るい笑顔を見せた。

コスモベースの隔離された部屋の扉の前で、女教師ミムラは彼女専用の通信器に送信されてきたデータに目をやり、軽く眉をしかめた。

音声反応がある……アウルがまた、歌っているんだわ。

美しい少女のへ　巖頭に立ちて

黄金の櫛とり　髪のみだれを
梳きつつ口吟む　歌の声の
神経き魔力に　魂もまよう

岩場にたたずむ金色の櫛を持った美しい少女の歌に船頭が魅せられると、船が川の渦の中に飲み込まれてしまう。
ローレライ、そんな歌詞で綴られている地球の伝説の歌を

「アウル、ミムラよ。部屋に入りたいの。だから、その歌をやめて」
戸口に付けられたインターフォンに向けて、女教師は諌めるようにそう告げた。厳しいが親愛のこもったその声音を待っていたかのように歌声はぴたりと止まり、そして彼女がそうする前に吸音制御室の扉が開いた。

アウル・ナイトシェイドは、座っていた椅子の足を軽く蹴るように立ち上がり、扉の向こうから彼に近づいてくる女教師に向かって笑顔を作った。双子の姉のジルよりも少し青白い肌と寂しげな黄金の瞳。華やかな姉と対照的に弟のアウルの印象は、静かな湖面の底を思いおこさせるように静かだった。
太陽と月。コスモベースの誰もが、ジルとアウルをそんな風にとらえていた。

「良かった。退屈でたまらなかったんだ」
心底ほっとした様子のアウルを見て、ミムラもつられるように笑顔を浮かべる。
「こちらも良かったわ。Ｓｅｍｉ－インターシップに乗れなくて、もっと、しょぼくれてるかと思っていたから」

搭乗を拒まれてしまった宇宙船の名を聞いて、アウルは少しすねたように口をとがらし、事実上、軟禁されてしまった吸音制御室の大型モニターの方へ目をやった。

天の川のたもとに浮かぶ青い惑星“地球”に向け、星座の光の帯の中を進んでゆく宇宙船。その側面には“ｓｅｍｉ－ｉｎｔｅｒｓｈｉｐ”の文字がある。

「さっきからずっと、通信衛星から送られてきた映像を見ていたんだ。訓練生で１番の成績の僕が、何故、あの船に乗れないのさ？本当なら、僕もあの船に乗って地球に向かうはずだった。こんなに理不尽な扱いを受けるなんて、ぜんぜん納得がいかないよ」

「アウル、あなたには分からないの？」

ミムラの問いに金の瞳の少年は、無愛想にこう答えた。

「僕が歌うから？ローレライを」

「そうよ、あなたの歌は人の心を惑わす。もし、ｓｅｍｉ－インターシップの操縦席でそんな事が起こりでもしたら、訓練生たちの安全を私達は守れなくなるわ。それが、分かっているのに、どうしてあなたは、あの歌を歌い続けるの？」

「なんだか、心が落ち着かないんだ。歌っていないとすごく不安で……」

アウルは、そう言ったきり口をつぐみ、ぷいとそっぽを向いてしまった。

「歌うのをやめない限り、アウル……私はここからあなたを出してあげるわけにはゆかないわ」

彼女に背を向け、大型モニターに移された宇宙船の映像に見入る、アウル・ナイトシェイドの後姿に目をやり、ミムラは、はっと大きく金の瞳を見開いた。

彼女がアウルに教えた伝説の歌、ローレライ。

ゆったりとした4拍子のメロディーが耳に響いてくる。ただし、言葉のない形で。

口笛……。アウル、何故、そこまであなたは、その曲にこだわるの？

ローレライの調べを口笛で奏でながら、アウル・ナイトシェイドは遠く離れた太陽系の銀河の海に思いを馳せていた。次第に強くなってゆく不安の思いを胸に抱きながら。

＊　＊　＊

ジル・ナイトシェイドと他の3人の訓練生たちを乗せた宇宙船“ｓｅｍｉ－ｉｎｔｅｒｓｈｉｐ”は、地球から3000光年ほどの距離にある射手座の散光星雲の近くを航行していた。

「おっ、彗星発見！みんな、窓の外に注目して！太陽と反対側の方向に、青い彗星の尾が見えるよ」

インターシップの操縦席で、訓練生の一人が甲高い声をあげて、フロントガラスを指差した。ジルより二つ年上の彼は、熱心なコメットハンター（彗星捜索家）で、彗星が恋人の“彗星オタク”だ。

天の川に長く尾をひいて地球へ落ちてゆく彗星は、青い光の筋を星の間に残したとたん、ふっと姿を消してしまった。それでも、まだイオンテイルの残像が頭の中では、きらきらと輝いていて、訓練生たちは、しばらくは降るような星の列から目を離せないでいた。

「僕はあの彗星の尾に、地球に向けての、僕たちのメッセージを乗せたいと思っているんだ」

彗星オタクの彼は熱を込めて、そう言った。

「……」
ジルは、その言葉にちょっと眉をしかめてしまった。
「彗星の尾に？そんな事ができるなんて聞いた事もないわ」
「彗星の尾から電磁波が観測された事を知っているかい。それを利用して、テレビの映像や音声のように僕らの言葉を地球の人たちに伝える事ができないだろうか」
……理論的には可能でも、実現させるのはとても難しいわ―と、ジルは思ったが、
「故郷の星を亡くしてしまった私たちから、あの青い地球に警告のメッセージを送る事ができたなら、それはとても素晴らしい事ね」
と、笑ってみせた。

彼らが住むコスモベースは母体となる“星”を持たない単独の宇宙基地だ。なぜなら、彼らの母星はとうの昔に消滅してしまったのだから。
限界までの発達が、境界線を越えてしまった時、彼らの星は突然、崩壊した。そして、宇宙開発のために特に優秀として選ばれ、コスモベースに滞在していた百人に満たない研究者たちとその家族だけが、アンドロメダ星雲の星の間に取り残された。

“ワープ航法に入ります。ワープ航法に入ります”

再び、ｓｅｍｉ－ｉｎｔｅｒｓｈｉｐの警報音が鳴った。
フロントガラスに目をやり、計器で現在位置を確かめてから、ジルは興奮気味に言った。
「１０分後にまた、ワープ体制に入ります。みんな、席について安全体勢をしっかりと取って。今度は一気に地球の近くまで飛ぶわよ！」

モニターの映像の中で、
雲の隙間から太陽の光を受けた地球の海が、コバルトブルーに輝いている。

暗い宇宙の空間に浮き上がった限りなく透明なその色を見ていると、なんとなく厳かな気分になってくる。ジルは、操縦席の安全バーをおろし、ほうっと小さく息を吐いた。

銀河の果てから見つめているだけなら、とても美しい地球。
けれども、

温暖化、オゾン層の崩壊、異常気象、水不足、気象の変動、洪水、旱魃、食料不足。
それに伴う大量の難民の増加と地域紛争。

それを放置しておいたなら、あの星は、ほとんど私たちの星と同じ道をたどる事になる。
もし地球から８．６光年離れたシリウスＡ、あるいは２５．３光年離れたベガが超新星爆発を起こしたら、地球に住む生命はほぼ確実に絶滅するか壊滅的な打撃を受ける。そんな危険な仮説だって、有り得ないとは言い切れない。
「地球の人とコンタクトを取れたなら、私は真っ先にそれを伝えたいわ」
独り言のように呟いたジルの言葉が終わらぬうちに、
“ワープ開始、ワープ開始”

宇宙船の中に、再び、警報音が鳴り響いた。そして、光速の波に乗ったｓｅｍｉ－インターシップは、星間の海を一気に突き抜けていった。

＊　＊　＊　＊　＊

「そんなに地球が気に入ったんなら、いっその事、みんなで地球に移住してしまえばいいじゃないか」

コスモベースの吸音制御室で、アウル・ナイトシェイドは、こそばゆいような笑みを浮かべて、女教師ミムラに言った。

「とんでもないわ！同族の難民さえ受け入れを拒みたがる彼らなのに、金の瞳、緑の髪……明らかに地球人と違う私たちが降りていったりしたら、どんな騒動が起きると思うの。あの星の人たちの心はまだまだ、未発達で未知な物を迎え入れるほどの余裕はないのよ」

「なら、征服してしまえば？僕らの科学力をもってすれば、簡単な事じゃない。見守って助言を与えるなんて、面倒くさいプロジェクトなんか破棄して」

ミムラは半ば、非難するような口調で自分の教え子を睨めつけた。

「アウル、そんな事を言うものじゃないわ！そんな戦いを起こしてしまえば、また星が一つ消えてしまうわよ」

ミムラの剣幕に、アウルはぷうっと噴出しながら“冗談だよ”といたずらっぽい笑顔を見せた。だが、女教師はまだ、憤りが治まらぬ様子でアウルをたしなめた。

「本当に危険な考えを持つのはやめて！他の教師は騙せても私はそうはいかないわよ。あなたが持っている特殊能力は“ヒュプノシス”……ローレライの歌のように歌う事で人の心を操る“催眠能力”だけではないわね。

接触感応、透視能力、精神感応、予知能力、念動力。

そのすべてを兼ね備えたあなたが、その気になれば、一人でも地球に相当な被害を与える事ができるでしょう。でも、アウルは、今

までは上手く能力を制御して、それを乱用することはなかった。だから、私も気づかぬふりをしてきたのに、何故なの？どうして、そこまで心を揺らしているの」
姉のジルとミムラだけが、アウルの本当の力に気づいていた。そして、アウルもそれを知っていた。
「だって、星の上を歩きたいんだ。こんな宇宙の空間に浮かんでいるだけの自分が、僕は哀しくてたまらない。インターシップに乗って、あの青い地球に降り立ってみたい。ミムラ、あなただって、そんな夢を見たことがあるんでしょう？」
どんな言葉でなだめれば、この子の気持ちを治める事ができるんだろう？
永遠に見つかりそうもないその言葉に、ミムラはただ、沈黙するしか手立てがなかった。

長い沈黙を二人が息苦しく感じ始めた時、突然、ミムラの通信機が激しく鳴り響いた。即座に吸音制御室の設備が機能し、その音は壁の中へ吸い取られてしまったが、滅多に鳴ることのない第１級の警報音に、女教師は驚いた様子で通信機に耳を傾けた。
“ｓｅｍｉ－インターシップがワープ地点から軌道をはずしました。１５分後に射手座Ａ＊の電波源に侵入します。誘導限界は到達前－５分。ミムラ教官、非常事態です！すぐに管制室へ戻って下さい！”
「何ですって！」
顔面を蒼白にして座っていた椅子から立ち上がったミムラに、アウルが声を荒げた。
「ジルたちのインターシップが射手座のＡ＊に？！本当に？！」
「アウルはここにいて！部屋を出るんじゃないわよ、絶対に！」
有無を言わせぬ声音でそう言ってから、女教師は彼女の生徒を吸音制御室に残し、扉のロックを固く閉めた。それから、脱兎のごと

く管制室に向けて駆け出した。
「ミムラ、ここを開けて！僕も一緒に連れて行って！」
懸命に扉をたたいてみても、応答はない。真っ赤に充血したこぶしを下におろし、アウルは唇を震わせながら、ｓｅｍｉ－インターシップを映しだした大型モニターに目をやった。

＊　＊　＊

銀河の中を行く1機の宇宙船
－ジルと他の訓練生たちを乗せたｓｅｍｉ－インターシップ－
それが、異様に強力なエネルギー波を放射する重い星へ引きずられてゆく。
射手座のＡ＊は、大質量のブラックホール。一度、その中へ落ち込むと光でさえも、その重力からは逃れなれない宇宙の墓場。

「お願いだから、僕をここから出して！暗黒星雲の果てへ、ジルとみんなを行かす気なのか！」
滲みだした鮮血をかまうこともしないで、アウルは吸音制御室の扉をたたき続けた。
コスモベースの内部には、第1級の危険を知らせる、けたたましいほどの警報音が鳴り響いていた。だが、極限まで外部と遮断された彼の部屋には、物音一つ響いてはこない。
悔し涙が知らず知らずのうちに溢れてくる。それをこらえようとして、アウルははっと吸音モニターから逆流してきた音声に耳をすませた。
Ｉｃｈ　ｗｅｉｓｓ　ｎｉｃｈｔ　ｗａｓ　ｓｏｌｌ　ｅｓ　ｂｅ

ｄｅｕｔｅｎ，
Ｄａｓ　ｉｃｈ　ｓｏ　ｔｒａｕｒｉｇ　ｂｉｎ
ーなじかは知らねど、心わびて
昔の調べはそぞろ身にしむー

「ローレライ……」
その音をそう認識した時、アウルは絶叫した。
「この扉を開けろ！僕をここへ閉じ込めるな！！」

緑の髪と金の瞳の少年の声が、部屋に轟いた瞬間、耳をつんざく大音響がコスモベースに響き渡った。アウルの中からほとばしった未知の“力”。その作用で、一気に膨れ上がった吸音制御室の空気の密度が、狭い空間に耐え切れず部屋の扉を押し破ったのだ。そして、アウル・ナイトシェイドは、吸音制御室から出て行った。粉々に砕け散った扉の上を夢遊病者のように覚束ない足取りで通り過ぎながら。

コスモベースの管制室。
「ｓｅｍｉーインターシップの自動操縦システムへの精測レーダー進入を行います。誘導限界は3分。もし最終進入において5秒間インターシップからの送信がなかった場合はこちらからのアシストは無効となります」
徐々に射手座Ａ＊の電磁波ーブラックホールーの中へ引きずり込まれてゆく、ｓｅｍｉーインターシップの映像を食い入るように見つめながら、女教師ミムラは、口惜しげに唇を噛みしめた。
「事前の整備には、何のトラブルもなかった……それなのに、何故

こんな事に……」
　コスモベースからｓｅｍｉ－インターシップへ直接、誘導電波を送って軌道を修正させようとしても、絶大なブラックホールの吸引力に、勝てる見込みは１０％にも満たない。
　手塩にかけて育ててきた訓練生たちを、むざむざ宇宙の墓場に追いやってしまうなんて……
「駄目です。訓練生からの送信はありません。ｓｅｍｉ－インターシップは、ブラックホールの重力圏にすでに突入した模様で……」
　管制官の一人の声が空しくコスモベースに響いた。
「そんな、他に何か手立てはないのっ！あの子たちを見殺しにはできない！」
　泣き声のような叫びをあげたミムラは、その時、管制室にふらりと入って来た少年の姿に目を見張った。
「アウル……アウル・ナイトシェイド……」

　漕ぎゆく舟人　歌に憧れ
　岩根も見やらず　仰げばやがて
　浪間に沈むる　ひとも舟も
　神怪き魔歌　謡うローレライ

　アウル、歌わないで。
　その歌を歌っては駄目。
　ぼんやりと薄れてゆく思考の中で、ミムラの頭の中に透き通るようなアウルの歌声だけが木霊していた。

ローレライ

それは、伝説。そして、地球から宇宙に伝え語られた魔性の調べ。

＊　＊　＊

「どうしろっていうの！計器もレーダーもすべてブラックホールのエネルギー波に狂わされてる！」

凄まじい重力がのしかかるｓｅｍｉ－インターシップの中で、ジル・ナイトシェイドはなす術のないもどかしさに声を荒げた。

年周視差の計算を間違えてしまったの？にしても、ワープ地点を射手座Ａ＊に設定してしまうなんて、有り得ない！

暗黒の星雲が迫ってくる。インターシップの窓とフロントガラスには、ジルたちと同じように宇宙の塵や小さな星がきりきりと舞いながら、ブラックホールの重力に引きずられてゆく。

「ジル、インターシップを捨てて、個人用の高速ロケットで脱出しよう！まだ、今なら間に合うかもしれない！」

訓練生の一人が言った。ｓｅｍｉ－インターシップには一人に一機の小型ロケットが搭載されている。それを使って超高速で重力圏を脱出する。もう、それしか手立てはなかった。

「みんなも急いで、事態は一刻を争う！」

ジルは、即座に立ち上がり脱出ハッチの方向へ走り出した。

「みんな、どうか無事で！きっと、また会える」

短い言葉を交わすと、訓練生たちはそれぞれのロケットに乗り込み、ｓｅｍｉ－インターシップから飛び去っていった。

だが、すでに船外は、ブラックホールの負のエネルギーで覆い尽くされてしまっている。

“操縦不能”のサインを目にして、ジル・ナイトシェイドは、悔し

げに、乗り込んだ脱出用ロケットの計器に拳をたたきつけた。
「こんな宇宙の果てで消えてしまうの！？嫌よ、それだけは絶対に嫌！」
ジルを乗せたロケット横を力尽きた幾つもの星々が、哀しい声をあげながらブラックホールに落ち込んでゆく。

星たちの声が聞こえる……。
そういえば、彗星の尾にメッセージをこめれるんだと、訓練生の彼は言ってた。

どうしようもない絶望の中で、ふと、そんな事を思った時、ジルははっと遠くから響いてくる声に耳をすませた。
“ジル？ジル……何処にいる？”

聞き慣れた双子の弟、あれは、彼女の半身の声。

「アウル、アウルなの？助けて！私はここよ、ここにいる！！」
そう叫んだ直後、ジルを乗せた脱出用ロケットは、木の葉のように舞いながら、宇宙に巻き起こる暗黒物質の渦の中へ消えていった。

＊　＊　＊

コスモベースの誰もかもが、身動きができなくなっていた。アウル・ナイトシェイドの奏でる歌が、ゆらゆらと頭の中に流れ込んでくる。乗組員たちは魅せられたように、その音色に心を奪われ、ｓｅｍｉ－インターシップの救助の事などすっかり忘れて、夢うつつに、その場に立ち尽くしている。
かろうじて意識を持ちこたえていた女教師のミムラは、コスモベ

ースの大スクリーンを背にしたアウルの姿を見つめて、大きく目を見開いた。

消えてゆく……？

アウルの姿がゆっくりと薄れてゆく。彼はミムラの戸惑った視線を感じてか、かすかな笑みを浮かべて言った。

「ローレライ……僕は思うよ。金の瞳と緑の髪を持つ僕たちだって、この歌が伝えた伝説の場所に、いつかは降り立つ事ができるんだ」

そして、アウルの姿が完全に消えてしまった時、
けたたましい警報音とともに、コスモベースが激しく揺れた。
大地震のような激震の中で、

“第１級危険信号！コスモベース前方に超重力空間が出現。緊急避難体制をとれ”

金属めいた声音の警報のアナウンスが、ぼんやりと薄れていたコスモベースの乗組員たちの意識を、一挙に目覚めさせた。
その時彼らは、ぎょっと操縦室の大スクリーンに目を向けた。
周りを強力なエネルギーとＸ線に囲まれた黒い空間が、目の前に立ちはだかっている。
「ブラックホール！！なんで？！どうして、こんな場所に現れたの！」
あせった様子で、そばにいた管制官がミムラに言った。
「い、位置が、コスモベースの位置が移動しています！ここは射手座のＡ＊、大質量ブラックホールの真正面です！」

まさか、ラウルが！？……あの子の力が、コスモベースを射手座

のＡ＊に移動させたっていうの！？わからない。それでも、
「吸い込まれる！ｓｅｍｉ－インターシップと同じように、私たちのコスモベースもあの重力の渦の中へ！」
ミムラの絶叫とともに、コスモベース全体は、ブラックホールの重力の中へ落ち込んでいった。

＊　＊　＊

どのくらいの時間がたったのかはわからない。ぼんやりとミムラは立ち上がり辺りの景色を見渡した。
コスモベースは、正常な姿のまま、そこにあった。
計器類も椅子やテーブルの備品も、破損している様子はない。
けれども、ミムラも他の乗組員たちも一様に不思議な面持ちで、お互いの顔を見やった。そこには、金の瞳と緑の髪をもつ者は、一人もいない。
青い瞳に小麦色の髪、あるいは黒い瞳に黒の髪……
瞳と髪の色が変わってしまっている……
どういう事？！これじゃあ、まるで地球人と同じだわ。
開いたハッチの向こうから、鳥がさえずる声が聞こえる。ふらりと覚束ない足取りで、外に出たミムラは信じられないと、声を荒げた。
コスモベースの外の世界は目に染み入るような緑の森。そして、響いてくるのは、さらさらと流れる水の音。
にわかに脳裏に浮かぶのは、映像でしか見たことのない惑星……地球
「ここは、地球？まさか……そんな事って？！確かに私たちのコス

モベースは、ブラックホールの中に吸い取られたというのに……」
ブラックホールを通り抜けて地球にワープしてしまった……とでも言うの？
その時に何らかの力がかかって、瞳と髪の色まで変えてしまった？
まさか、アウルが……でも、そこまでの力を彼が持っていたなんて……私には信じられない。

「ミムラ教官！訓練生たちが！」
乗組員の一人が森の向こうを指差し、驚いたような声をあげた。
岩場のある川べりの方向から、ｓｅｍｉ－インターシップに乗り込んだはずの卒業生たちが、コスモベースに向けてふらふらと歩いてくる。彼らもやはりブラックホールを通り抜けて地球に降り立ってしまったのだろうか。
「あなたたち、よく無事で……」
だが、彼らの顔をしてはいても、その瞳と髪の色はやはり地球人のような色に様変わりしていた。
訓練生らの元へ駆け寄ったミムラは、喜びと戸惑いと不安の気持ちが混ざり合い、泣きたいような気持ちになった。だが、歩いてきたのは３人、訓練生は４人のはず……
「ジルは？……ジル・ナイトシェイドは何処？！」

“ジル、起きて。もうすぐ、地上が見えてくるから”
ジル・ナイトシェイドは、聞き覚えのある澄んだ声に目覚めさせられ、乗り込んだ高速ロケットの中で瞼を開いた。
夢を見ているのだろうか？回りに過ぎてゆくのは星屑の欠片でもなく、彗星の尾でもない。

青い空にかかる白い雲。
ロケットの操縦席から、眼下に広がる一面の緑の森が見える。長く蛇行した川が森の木々の合間を縫って、遠くの海へ流れてゆく。
「こ、これは、この景色は……」

地球?!

そして、金の瞳と緑の髪の少女を乗せた宇宙船は、地上に向けて下降しながら、ゆっくりと速度を落としていった。

美しい少女のへ　巖頭に立ちて
黄金の櫛とり　髪のみだれを
梳きつつ口吟む　歌の声の
神経き魔力に　魂もまよう

ブラックホールに飲み込まれた瞬間に響いてきたその歌声が、再びジルの耳元に流れてきた。
「アウル、アウルなのね?ブラックホールに落ちた私をここへ連れてきてくれたのは。でも、何処、あなたは何処にいるの!」
だが、ジルの問いかけにその声は、こうとしか答えなかった。
“君はこの地球では一人きりの異星人。それでも、地上では仲間たちが待っていてくれる。彼らはもう、君とは違っているのだけれど、ジルはみんなとここで暮らせよ。
“僕は思うよ。金の瞳と緑の髪の……そんな僕たちだって、この地球で暮らせる日がきっと来るって”

徐々に小さくなってゆくアウルの声に、ジルは乞うように言った。
「アウル?!駄目よ、私と一緒に来て!お願いだから」

だが、アウルの返事はもう返ってはこなかった。

地上では、どうにか落ち着きをとりもどした乗組員たちが、コスモベースが降り立ったと思われる場所の確認を始めていた。
管制官の一人がミムラに言った。
「やはり、ここは、地球です。地球の地理でいえば、この位置は欧州の一角。ライン川流域にある町、ザンクト・ゴアルスハウゼン、その東の森の中です」
「ライン川流域！？それって、“ローレライ”！？まさか、ここは、アウルが歌ったあの伝説の場所？！」

アウルの歌にたぐり寄せられ、ブラックホールに引きずり込まれた私たちの境遇は……まるでローレライの伝説をそのまま、なぞったかのようだ。ただ、違うのはコスモベースの行き着いた先は、死の淵ではなく緑の地球。

ミムラは、解せない気分のままに、ふと空に目を向けた。その時、空の彼方がきらりと眩しく輝いた。抜けるような青い空から降りてくる銀の光。
「あれは……？」
眩しげに目を細めたミムラに、傍らにいた管制官が唖然として言う。
「宇宙船……だ。目視でも姿が確認できます。あれは、ｓｅｍｉ－インターシップの緊急脱出用ロケット。そして、最後の緊急用ロケットに乗った訓練生は……」
「ジル・ナイトシェイド！」
興奮気味に瞳を輝かせたミムラに、管制官が再び驚いたような声をあげた。

「ミムラ教官！計器が何かの信号を受信しています。これは……」
「これは……何？」
「音声信号だ……」

なじかは知らねど　心わびて
昔の伝説は　そぞろ見にしむ

「ローレライ！これは、アウルの声だわ。アウル、彼がいるの？一体、何処に？！」
だが、ミムラの問いに管制官はわからないという風に首を横に振った。
「物質反応は何もありません。彼の存在を確認することはできません」
その言葉にミムラは深く息を吐き、空から地上に降りてくる銀のロケットを見つめて、少し寂しげに微笑んだ。
「アウル……ローレライの歌の調べに誰よりも心を奪われていたのはあの子だったのかもしれない。あの子が一番、地球に焦れていた。だから、彼はローレライを歌いたがったのよ。私たちをこの場所に来させるために、彼がここに来るために」
“僕はずっと見つめているんだ。今までも、そしてこれからも”
ローレライを口ずさみながら。

金の瞳と緑の髪を持つそんな僕たちが、いつか地球で暮らせる日がきっと来る。

僕は……

その日まで。

〜完〜

（後書き）

サイエンス・ファンタジー色が強い作品になってしまいました。

ブラッドベリが好きなので、何となくそんな感じで。

ローレライ伝説には、前々から心が魅かれてなりませんでした。SFと結びつけるのは、ちょっと難しかったけれど、最後まで書けてよかったです～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2197e/

ローレライ２００８

2010年10月11日18時16分発行